

「歩きスマホ」という言葉をよく耳にします。おまけに両耳にはイヤホンという人もいます。それが原因で、駅ホームからの転落、階段や通路での接触・転倒などの事故が起きていることもあります。危険なのは自分だけではありません、他者への迷惑行為、危険行為になっていることに気づいてほしいし、気づかなければなりません。小学生がそういう行為をしているかどうか分かりませんが、まわりに注意を払うことができない大人の危険な行為に巻き込まれることがないようにしなければなりません。他者に対して迷惑な行為であるかどうかという意識がしだいに低下していく傾向は社会全般に見られること、そしてそれは学校も例外ではないと思います。学校は同年代の児童生徒が生活する場であるために、違った価値観が入りにくく、そして受け入れにくい場もあります。「子どもの世界」ということで済ませることができないことを私たちは改めて考えながら、子どもたちの実態をしっかりと把握し、子どもたちに分かる言葉で、伝わる方法で様々な働きかけをしていかなければなりません。

【親の前では】

親は子どもを信じます。子どもは親の期待に応えようとしています。信じてもらえることは嬉しいことです。これが普通の姿なのかもしれません。しかし、親が子どもを信じるときに、「自分の子は絶対に悪いことはしない、自分の子は絶対に嘘をつかない」という気持ちが強すぎると子どもにとってはあまりよくない影響が出てくることがあります。子どもは悪戯もすれば、怒られるようなことだってしてしまうことがあります。上に述べた「自分の子どもは絶対に・・・」と思い、それを子どもに伝わるように普段から接している親に、子どもは本当のことが言えるでしょうか。なかなか言えないのです。当然、先生に本当のことを言えば親に伝わると思えば先生にだって本当のことは言えなくなります。これはときどき見られる子どもの姿です。私はこういう子どもをとても気の毒に思います。

比べて、「今日友だちとちょっと悪いことをして先生に怒られたんだ」というようなことを親に話せる子はどうでしょう。もちろんそれで褒める親はいません。叱る必要があるときは叱り、先生に話したいこと、確認したいことがあればきちんと連絡をとることができます。

正直でいることができれば、間違いを認め、謝り、自分を正すことができます。そうでないと、心の中にどんどん自分で消化できないことが蓄積されていきます。誰がいけないのでしょうか。この場合だけは子どもは悪くありません。

あるとき数名の子どもたちとその保護者が集まっていた場を通りかかりました。私がある子に話しかけると、その子の母親が「また何かしたの?」と子どもに聞きました。そういう聞き方をされたら「何もしていない」としか答えられないなと感じました。親の一言の難しさ、親の言葉かけの大切さを考えてみましょう。

【災害や事故に備えて】

10月4日（土）の昼過ぎに小田急線が事故で一時運転を見合わせることがありました。事故が起きた時刻は12時半ごろであり、土曜講習、土曜活動で登校していた子どもたちの大半は下校途中でした。他の子どもたちは、合唱部の活動中か2時までの学校開放の時間を友だちと楽しんでいました。学校からは保護者に電車の運行状況をメールで知らせ、学校にいる児童にもしばらく様子を見てから帰るように指示しました。しばらくして電車は運転を再開したので大きな混乱はなかったと思いますが、いつそういう事故に巻き込まれてしまうか分かりません。そういうときのために鞄には非常用の飲料水などを入れておくように声はかけているのですが、実際はどうでしょう。

自然災害に対しての備えも、先の震災を忘れることなくしっかりとしておかなければなりません。9月末に、保護者の皆さんのご協力をいただき、全校児童分のシュラフ（寝袋）を用意することができました。学校には、飲料水、乾パン、白米、缶詰（個々が用意し学校に保管）、マット、毛布、シュラフ、発電機、プロパンガスなどを用意していますが、災害への備えは現状でよしとすることなく、これからも継続的に充実を図っていきます。

【誰がそうさせてしまうのか？】

子どもに身につけさせなければならない力を、大人の力不足が原因でそうできていないと思われることがあります。私たちにできることは限られているかもしれません、できる限りのことはしなければなりません。

学校で生活する子どもたちの中には、残念なことではありますが上級生になってもこちらが期待するような規範意識が身につかないことがあります。そして、そういう子たちはときに集団を作り、その中でお互いに心のよりどころを見つけ合います。簡単に言うとお互いに高め合おうとする意識が持てなくなってしまうようです。全てを教員や親の責任と言ってしまうのは簡単ですが、それは何の解決にもなりません。子どもたちに成長できる場を提供しなければならない私たちです。保護者の皆さんと一緒にいろいろな問題に向き合っていく毎日にしていかなければなりません。